

## 21世紀の消防と

## 消防技術の将来

—「21世紀を考える

—国民各層の声—」について—

自治省消防庁  
危険物規制課長

小林 恭一

「21世紀の消防を考える  
—国民各層の声—」(続き)自治体消防50年記念事業実行委員会  
21世紀の消防を考える会(座長・伊藤和明)

ます。

③ 高齢化社会における消防  
日本では、平均寿命の伸びと出生率の低下などを背景にして、少子・高齢化社会が到来すると見込まれています。特に、2020年にはわが国の人口は4人に1人が高齢者になると予測されるなど、21世紀の早い時点でいまだかつて世界が経験したことがない超高齢化社会に突入するものと予想されています。

一般に高齢者世帯では、火災が発生した場合の焼死に至る危険性が大きいと言われています。また、高齢者は病气や事故により救急搬送される可能性も高いことから、今後は高齢者の救急需要が増加することも予想されます。さらに、地震などの大規模な自然災害によって犠牲となる比率も高齢者は高くなっています。これからの社会では、

高齢者の安全をいかに確保するかが重要な課題と考えられます。

一方で、これからの高齢者は、経済的に自立し、社会に貢献出来る知識や能力や経験を持っている方が現在にも増して多くなると考えられます。防災の分野でも、そのような高齢者の方々の力を生かせる取り組みがいっそう求められるようになるでしょう。

## 〈高齢者の増加への対応〉

高齢者の住宅の火災の発生を防止したり、火災等の災害の際に高齢者の生命を守ることにについては、高齢者の家庭を戸別に訪問して相談に乗るなど、現在でも消防が特に力を入れているところですが、救急需要が増加すること

(近代消防98年12月号)

への対応とも併せ、消火・通報の自動化やホームセキュリティのネットワークを構築するなどの工夫を行うとともに、地域ぐるみで日頃から高齢者世帯に目配り、心配りをするなども一層重要になると思われます。

この場合、消防団と自主防災組織等が連携して高齢者の安全に取り組みむと、消防職員がそのような活動を積極的に支援することなどは、地域ぐるみで高齢化社会の安全を守っていくための有力な手法と考えられます。

## 〈福祉、医療との連携〉

災害時だけでなく平常時から高齢者の健康や安全に配慮することが、災害時の犠牲を小さくすることにつながることを踏まえると、福祉や医療の分野と消防が相互に連携をとっていくことも考えられます。

その場合の連携は、それぞれの地域の実情に合った形で展開されていくことでしょう。例えば、高齢者世帯を防火のために訪問した際に同時に健康についての悩みを聞いてあげるようにしたり、一人暮らしの老人の異状を知らせる自動通報装置からの通報が消防署に入った場合、それを福祉拠点にも配信するようにする、などといった展開が考えられるのではないのでしょうか。

アンケート結果で見ると、消防団に対し、日頃から防火指導を通じて高齢者等の状況把握に力を入れるなど、高齢者の安全の担い手として活躍するこ

とを期待するとの声が多く寄せられています。また、救急についても、今後は、からだの不自由なお年寄りを救急車で福祉施設に運ぶサービスが行われるようになるなどの福祉的な役割を担うことについても期待が集まっています。

#### 〈高齢者等に配慮した建物〉

最近では、バリアフリーという言葉も定着してきましたが、これからの住宅や公共的な建築物では、段差をなくすなどの高齢者や障害者への配慮が欠かせません。火災等の災害時にこれらの人々も安全確実に避難ができるように配慮された建築物が今後一層増えるよう、様々な努力をしていくことが大切と思われまます。

アンケート結果でも、ビル火災対策として誰もが安全に避難できる避難誘導システムなど、高齢者や障害者への特別な配慮がなされたビルが増えることに対する期待が大きく出ています。

#### 〔4〕 消防の国際化のさらなる進展

通信技術や交通網等の発達と普及により、国境を越えた人々の往来は一層活発なものとなり、経済活動のグローバル化もますます進展してきています。また、近年、異常気象によると思われる災害が多発するようになったこと、情報化の進展に伴い、世界の各地で発生した地震や洪水等の災害に関する情報がリアルタイムで世界中に配信され

るようになったことなどから、国際社会が協力して被災地に対して緊急援助を行う場面が増加してきています。このような事態は、今後は、ますます増えてくるものと予想されます。

一方、地球温暖化問題など、国際社会全体として地球的な視点から解決を迫られている問題も顕在化してきており、政府レベルの取り組みに加えてNPOの活動も活発になってきています。このような国際化の動きの中で、国際社会の一員としてより大きな役割を果たすよう、わが国への期待はこれ以上にならざるを得ないと思われまます。

#### 〈国際緊急援助活動〉

国際社会における消防についてのアンケート結果を見ると、世界的な大災害が発生した場合に、我が国の国際消防救助隊や医療チームの活躍に多くの期待が寄せられていることがわかります。

海外で起こる災害に対して、わが国の消防が国際社会の一員として活動することは諸外国からも期待されています。すし、先端技術を活用した高度な技術や装備を持ち、練度が高く士気の高い日本の国際消防救助隊は、このような期待に十分応えうるものです。このような期待に応え、これまで以上に国際消防救助隊や医療チームの派遣活動を充実させることが重要になると考えられます。

このような国際的な災害援助活動に

おいて、今後は、わが国がリーダーシップを発揮していくことが期待される場所です。

また、国内で大災害が発生した場合に備え、海外からの援助隊を円滑に受け入れることができるようにしておくことも必要でしょう。

#### 〈技術協力・教育・研究〉

消防の技術協力の分野では、開発途上諸国のニーズを的確に把握し、ニーズに沿った研修生の受入れや専門家の派遣、資機材の供与などきめ細かな協力を実施していくことが一層重要になると思われます。また、研究・教育の分野では、世界の消防防災に関する研究をリードしていく人材がわが国から育つことが期待され、そのための環境づくりが望まれます。

#### 〈消防分野における国際的な整合性の確保〉

アンケート結果で見ると、避難口のマークが世界的に統一されるなど、火災が発生した時にどの国でも迷わずに避難したり消火したりできるような国際的な規格の標準化が進むイメージに対しても期待が集まっています。世界中の人々の交流が盛んになれば、外国で火災などの災害に遭遇する可能性も増えることから、このような整合性の確保の必要性が認識されているものと思われまます。

また、消防・防災用の機械器具や危険物などについては、このように、使

用する場面はかに、国内外で生産される工業製品の貿易や流通を円滑にするという観点から規格等の整合を図ることの必要性もますます高まってきています。こうした分野でも、わが国には、その技術とリーダーシップを発揮していくことが求められるでしょう。

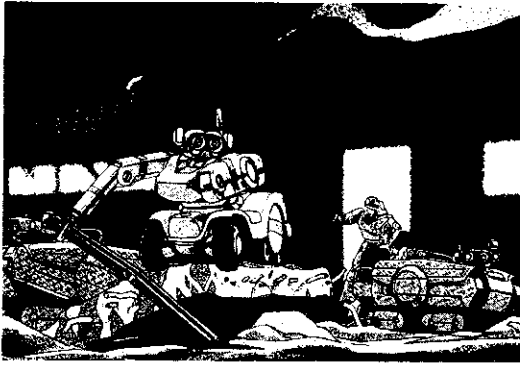
#### 〈国内の外国人への対応〉

国内においては、外国人の増加への対応が重要となってくると思われまます。国内に滞在する外国人の数については、今後とも伸びることが予想されますし、外国人なしでは成り立たなくなる産業や、外国人の比率の高い地域が出現することも見込まれる場所です。

火災防止の行動、災害時の行動、応急手当などは国によって異なる面もあることから、外国人の風俗・習慣に配慮しつつ、わが国の災害特性に合った適切な消防防災行動の啓発普及に努めていく必要があると考えられます。

#### 〔5〕 科学技術の進歩と消防

20世紀後半は、科学技術が著しく発展するとともに、それが社会経済に対して大きなインパクトを与えてきた時代でもありました。中でも情報通信分野の発展がもたらした影響は大きく、今日の情報化社会を現出させました。情報分野の科学技術はこれからも発展し、それに伴い社会の情報化もより高度により広く進展していくものと思われまます。また、それとともに、今後は、環



中央がアトム型。後方2台が鉄人型(有線誘導型)ロボット。鉄人型の後部には、人の乗れるスペースが確保されている。これらのロボットは必ずチームを組んで行動し、主に建物内の火災現場で活躍する。

支援まで行う危機管理システム、効率的な教育訓練システムなどがあげられており、安全、確実、迅速な消防防災活動への科学技術の貢献が期待されています。アンケート結果でみると、消防機器の進歩と普及による住宅火災の防止、高度なビル管理システムによるビル火災の防止、危険物施設での自動安全システムによる災害防止などの項目への期待が大きく、将来の消防においては、技術的な面から災害の拡大を防止するといったイメージが強く持たれていることがわかります。

また、先端技術を取り入れながら、消防・防災用資機材をより軽く、操作が簡単で、効果が高いものにしていくことは、消防職員・団員に占める女性の割合や中高年層の割合が増加すると考えられる将来においては重要な対策と考えられますし、自主防災組織等への普及の観点からも大きな期待が寄せられています。

さらに、個人レベルでの情報化が進展し、家庭や自動車に高度な情報機器を備えて情報をやりとりすることが一般的になるでしょう。119番通報の方法も多様化しますし、一般の人から現地の映像を入手して消防活動の情報ネットワークに流したり、逆に消防機関から傷病者の心肺蘇生などの応急処置を指導したりすることがこうした情報機器を用いてできるようになると考えられます。消防の情報システムも今後はこうした情報環境に対応したものとすることが重要となるでしょう。

境、エネルギー、バイオテクノロジーなどの分野や、医療・福祉関連の分野で科学技術が大きく進展することが期待されています。

一方で、科学の進歩によって新たな危険物質が生まれたり、世田谷ケープル火災のように情報網の一部が損傷しただけでその被害が広範囲に及ぶ事例も出てきています。

また、これからの社会は、環境に対しても十分に配慮することが求められることから、消防の分野においてもそうした配慮をすることが必要となつていきます。

〈期待される技術〉

「消防技術の将来予測調査」では、将来の消防防災関連技術として期待さ

れる技術課題について、その実現時期や重要性が調査されました。その結果を見ると、人間に代わって危険な現場で活躍する消防ロボット、軽量で断熱性に優れた耐熱軽量防火服、少量で消火効果の高い高性能消火薬剤、遠方にいる医師と密接な連携を行う救急車画像伝送システム、高度な情報技術を用いた災害状況把握システムなどの技術、機材に期待が集まっています。

情報分野の科学技術の著しい進展によって高度な情報化社会が現出しつつあります。消防防災に携わる行政機関を結ぶネットワークは衛星通信の利用、画像やデータなどのマルチメディアへの対応、地理情報システムによる空間データ利用が一層進展し、広域応援対応を含む防災活動全体が迅速で効率的なものとなっていくでしょう。

科学の進歩は、我々の生活を便利に、快適にしてきましたが、一方、これま

関する情報のデータベース、意思決定

また、地域の情報基盤整備の進展や

こうした危険性の高い物質にかかる

迅速な消防防災活動への科学技術の貢献が期待されています。

また、地域の情報基盤整備の進展や

こうした危険性の高い物質にかかる

消防機器の進歩と普及による住宅

また、地域の情報基盤整備の進展や

こうした危険性の高い物質にかかる

危険物施設での自動安全システム

また、地域の情報基盤整備の進展や

こうした危険性の高い物質にかかる

期待されます。

(近代消防'98年12月号)

は非常災害時にそのシステムがダウンした場合など、思わぬ被害に拡大する可能性があることにも留意する必要があるとあります。

### 〈環境への配慮〉

現在進められているハロン代替消火剤の研究開発などは環境保護への取り組みの例ですが、今後は、消防装備、資機材、消防設備などを省資源、循環型としたり、あるいは太陽光発電、新エネルギーを活用するなどの取り組みも行われようになっていくことが求められています。

## 第2章 21世紀の

### 消防への期待

以上、消防を取り巻く環境の変化と国民の期待を踏まえながら、地域の変換、自助意識の高まり、高齢化社会への対応、国際化の進展、科学技術の進展といった視点から、これからの消防に求められる役割について考えてきました。

そこで、ここでは、それらをまとめて21世紀の消防に期待される姿を描いてみました。

### ■機動力とネットワークによる安全の確保

災害から国民の安全を確保することは、これからも行政の基本的な責務であると考えられます。災害の様相が複雑化・多様化していく中、先端の科学

技術を用いた最新の装備を有し、厳しい訓練を受けた消防は、住民の身近にあって安全を確保するプロの防災機関として、今後とも大きな期待が寄せられるでしょう。

消防が、このような安全の守り手としての責務を十分に果たしていくためには、最新の科学技術の成果を活用し、環境の保全にも配慮しながら装備や資機材の高度化、情報化をはかり、その機動力を充実強化していくことが必要です。併せて、大規模災害等に対応するために、広域的な応援体制の一層の整備強化を図り、高度な情報システムにより各消防隊がそれぞれの得意分野を活かして相互に補完しながら応援し合うような全国的なネットワークの充実に努められています。

### ■安全なまちづくりの担い手

消防はその歴史の中で、消火から予防へ展開し、救急の役割を加え、阪神・淡路大震災以降は、一部の市で災害対策本部の運営を消防本部が担当する動きがでてくるなど、市町村全体の防災対策についても重要な役割を果たすようになってきています。

これからの消防は、建築物や産業施設の安全対策の推進について計画段階から消防の知識と経験を生かしていく

ことはもちろん、安全なまちづくりの担い手として防災の観点から関連する業務全般に深く関与していくことが期待されます。

### ■安心できる暮らしの支え

住民が安心して日々の暮らしを送れるよういざというときのセーフティネットとして安全を支えることはこれからも消防の重要な課題であり、ホームセキュリティネットワークの構築など一般住宅の防火対策の充実や救急体制の充実などの着実な進展が期待されます。

中でも救命率の向上に必要なプレホスピタルケアの充実のためには、救急救命士制度を軸として救急業務の一層の高度化を図るとともに、医療機関との連携や住民への応急手当の普及啓発を進めることを通じて、「生命の環」を大きく広げていく役割が消防に期待されています。

また、消防は住民の身近にあって24時間体制で安全の確保にあたっている機関として、高齢化社会の進展とともに、福祉や医療部門と緊密な連携をもった活動を期待されてくるでしょう。このように住民のニーズに対応して、関連する分野と相互に連携しながらきめ細かな対応をとっていくことも地域に密着した消防のこれからの姿の一つでしょう。

### ■住民一人ひとりの自助活動の手助け

安全を守るためには一人ひとりの自

主的な行動が不可欠です。このことは、阪神・淡路大震災等の災害を契機として、あらためて多くの人々に認識されました。

このような住民の意識を地域の防災力として結実するように支援を行い、地域防災の要である消防団の充実強化や自主防災組織の活性化などに具体的に結びつけて、「自分たちのまちは自分たちで守る」という強靱な自助、互助意識に貫かれた地域社会を実現していくことが、これからの消防にとつて大きな役割の一つになるものと思われ

ます。

また、近年盛り上がりを見せているボランティア活動について、消防としてその環境を整備していくことも必要でしょう。

### おわりに

以上のように、これまでの50年を振り返るとともに、21世紀の日本の姿に思いをめぐらしながら、アンケートの結果や応募論文の作品など国民各層の声を踏まえつつ、これからの消防に寄せられる期待について考えてきました。

国民の声の全体的な傾向としては、「地域活動」への意識が高いことが指摘できます。職場偏重の時代から家庭や地域に回帰している時代背景と、防災・安全の分野での地域での助け合いの重要性が阪神・淡路大震災等を契機

(近代消防'98年12月号)

に高まりつつあることがうかがえるものです。また、「技術」に対する期待も大きく、安全確保のために新しい技術をうまく使っていくことが求められていることがわかります。そのほかに、高齢化社会に対する問題意識の高さからか、高齢者福祉の分野と消防の連携を期待する声が大きかったこと、またインターネットの普及や情報公開の流れもあつてか、必要な時に必要な情報を得られるようにしてほしいという要望や、地域活動を情報面から支援することに対する要望が強かったことも注目されるでしょう。全体を通じて安全へのニーズの高さとプロフェッショナルとしての消防への期待を大きく感じることができました。

消防のこれからの予測することは、

## 「21世紀の消防を考える」 国民各層の声」の解説

はじめに

このたび、「21世紀を考える会」の報告書(21世紀の消防を考える)国民各層の声)が全国の都道府県、消防本部、関係機関等に配布された。

本稿では、同報告書のとりまとめ役として企画段階からこのプロジェクトに関わった立場から、その考え方等について若干の解説を行うこととした。

先行きの見通しがたてにくい現在、大変難しいことであることはいうまでもありません。しかしながら、消防の使命は国民の生命、身体、財産を火災等の災害から守るということであり、この使命を達成するためには、今後変化を遂げていくであろう人々の意識や社会の動きに適合した組織でなければならぬことについては異論のないところだと思えます。

このように考えれば、その時その時の問題点を真摯に受け止め、住民の安全を守るという消防の原点を踏まえつつ、中・長期的な視野をもって、柔軟な対応をとっていくように努力していくことが、今後、ますます大切になるのではないのでしょうか。

### 1 経緯

自治省消防庁では、自治体消防制度が発足してから今年の3月で50周年となることを記念して、関係団体とともに「自治体消防50年記念事業実行委員会」を設置し、数々の記念事業を実施してきた。

「21世紀の消防を考える」国民各層の声」にかかる検討は、そのよう

な同委員会の行う記念事業の一環として実施されたもので、消防の辿ってきたこれまでの半世紀の道筋を踏まえつつ、広く国民の声を聞き、21世紀の消防について国民が求めるものを整理し、今後の消防のあり方について考え、その結果を今後の消防行政に反映させようとしたものである。

検討は、学識経験者からなる「21世紀の消防を考える会(座長・伊藤和明 NHK解説委員・文教大学教授)」にお願いした。

また、「21世紀の消防を考える」とは別に、「消防技術の将来予測調査」を三菱総合研究所に委託して実施し、その結果を「21世紀の消防を考える」に反映させた。報告書には「付編」として掲載されているが、紙面の都合で次回以降に順次解説していくこととした。

### 2 「21世紀の消防を考える」の検討

#### (1) ブレインストーミングによる未来像の検討

21世紀の消防がどのようなものになるか、ということについて、筆者個人としては、

①21世紀の都市がどのようなものになり、どのような危険性を内包することになり、これに対して安全はどのようなシステムで守られ、そのシステムの

中で「消防」はどのような役割が期待されるのか

②過疎地域など都市への人口集中から疎外された地域は、人口減少、高齢者比率の急激な増大、建築物や都市インフラの老朽化、市町村財政の窮迫などの一方、地方分権が進んでいく中で、どのようなシステムで安全を確保し、消防はどのような役割が期待されるのか

③「消防」の中で「救急」が占める重要性は増大し続けているが、将来福祉分野との関係などを視野に入れた場合に、救急はどのような形に進化していくのか

④都市、建築、産業施設などの安全性の向上に消防が果たしてきた役割は大きいと思うが、これらの分野で安全を守るシステムは今後どのような形になり、消防にどのような役割が期待されるのか

などということに大きな関心があった。このような消防の未来像を考える場合、たとえば①について言えば、「21世紀の都市像」がどういふものになるかが前提になる。超高層ビルが林立し大深度の地下施設や交通網が四通八達した巨大都市に人口の大半が集中する社会になるのか、同じ巨大都市でも緑のオーブンスペースを計画的に配したゆつたりした都市の建設に成功するのか、巨大都市は消滅して中規模の都市が全国にバランスよく配置され、交



人口減少、高齢者比率の増大が進むなかで、消防の中の救急の占める割合が増大している。

その未来像を描くことが可能なのではないかと思うが、消防は未来社会の負の部分に対応するための言わば「受動的な」システムであるから、「21世紀はどのような社会になるのか」という前提なしに自立的に未来像を考えることは難しいのである。そうは言っても、「オーソライズされた日本社会の未来像がないので消防の未来像は描けません」というわけにもいかない。そこで、三菱総合研究所に作業

通ネットワークと情報ネットワークで効率よくそれらを結び「多極分散型国土」の形成に成功するのか、経済が破綻して超高層ビルはもはや建設されず、ビルや住宅は老朽化し、財政は疲弊して都市インフラの維持管理にすら汲々とする事態になるのか、……。

都市の未来像ひとつ取っても、考えられる未来の幅は非常に大きいし、それぞれについて、内包する危険もそれに対応する安全システムも、その中で消防に求められる役割も大きく違ってくる。消防（に限らず各分野）の未来像を考える場合に採用される最も一般的な方法は、様々な権威によつて描かれた日本社会の未来像を集め、その内容を分析し、消防を取り巻く未来の状況として捉え直し、しかる後に、未来の消防に期待される役割や消防の

あり方の未来像を演繹的に描き出していく、というものであろう。

我々も、当初そのような方法論によるものとしたのだが、集めてみると、適切と思われる「日本社会の未来像」なるものが極めて少ないのである。手に入るものが多いは、かなり前に「未来学」なるものが流行ったときのものかその亜流で、妙に明るく楽観的なものが多く、現在のベシミスティックな状況下で見るとかなり違和感の強いものばかりなのである。情報システムや通システムなど、特定のジャンルに特化した未来像を描いているものはあるのだが、消防の未来像全体を描くベイスにはなり得ないのである。

情報システムや交通システムは、それ自体未来の日本社会を能動的に形作っていくパーツとしての性格が強いものであるから、比較的独立して

を委託して、社会・経済、都市、建築、防災、情報など各分野の若手専門家に委員になって頂き、消防機関や消防庁の若手グループと一緒にワーキンググループを作つて検討することにした。

日本社会全体の未来像を描くことは難しいが、各専門分野で見えている未来の断片とそれにつながる消防・防災分野の未来像の断片を繋ぎ合わせていけば、それなりの未来の形が見えてくるのではないかと考えたのである。

検討はブレインストーミング方式で行つたが、いろいろな分野の若手専門家がそれぞれ提案する社会や科学技術の未来像とそれに関連する消防・防災分野の未来像は新鮮で示唆に富んでおり、それに触発されて新たなイメージも湧いてくるため、非常に刺激的な経験をさせて頂いた。

結局、このブレインストーミングで提案された様々なアイデアが、アンケート調査の調査項目の元になり、「21世紀の消防を考える」報告書の骨格やパーツとなり、「消防技術の将来予測」のためのデルファイ法による調査の項目の元にもなったのである。

「21世紀の消防を考える会」の発足

一口に「消防の未来像」と言っても、「消防サービスの未来像」、「消防組織の未来像」、「消防装備の未来像」など切り口によつて様々な未来像が考えられるし、消防、防災、救急等に関連する組織や機関、自主防災組織、ボランティア組織など、消防の周りに様々な関連分野もあるので、どこに重点を置いて考えるかによつて随分違ったものになる可能性がある。また、(1)でも述べたように、このような切り口の「消防の未来像」は、未来社会がどのようなものになるかということによつて大きな幅が生じてしまう。

いろいろと検討した結果、「国民が21世紀の消防に何を期待するか」という視点から整理すれば、未来社会がどのようなものになるかということに左右される度合いが少なく考えられるし、将来の経済・社会の状況に応じて「消防サービスの提供方法」や「消防組織のあり方」をいかにようにも変化させていくことができるので、今後「消防行政」を展開していく際に参考にしやすいのではないかと、ということになった。

「21世紀の消防を考える会」は、このような考えから設置したもので、21世紀の消防に期待する国民各層の声を取りまとめて頂くということから、あえて消防関係者以外の各界の有識者を中心とすることとし、座長もNHKの伊藤和明解説委員にお願いすることとした。

委員の方々に考えていただく「国民各層の声」の素材として、自治体消防50周年記念事業として行われた「21世紀の消防」についての懸賞論文募集の際の応募作品（934点）、全国縦断シンポジウム（全国7箇所）での議論に加え、自治体消防50周年記念全国縦断



シンポジウムの来場者等にアンケートを行うとともに消防庁ホームページなどを利用して21世紀の消防に期待するイメージについて調査し（アンケート回収数5173件）、また、三菱総研に調査委託した「消防技術の将来動向調査」の結果なども参考にした。

### 3 「21世紀の消防を考える会」報告書の概要

21世紀の消防を考える会では、上記のような手段で集められた「21世紀の消防に対する国民の期待」をもとに、特に消防に関係が深いと考えられる未来社会のトレンドを地域社会構造の変化、自助意識の高まり、高齢化社会の到来、国際化の進展、科学技術の進歩の5つの視点から整理するとともに、それぞれのトレンドに対応して消防に期待される役割等についてまとめた。

その内容については、報告書本文を読んで頂くのが最も近道であるが、まとめとして次の4点が上げられている。

■機動力とネットワークによる安全の確保

先端装備を有し厳しい訓練を受けた消防は、住民の身近にあって安全を守るプロの防災機関として今後も大きな期待が寄せられる。特に、情報技術と機動力を駆使し、各都市の消防がそれぞれの得意分野を活かして相互に応援し合う全国的なネットワークによって

大規模災害や特殊な災害にも対応できる体制づくりが期待される。

#### ■安全なまちづくりの担い手

消防のみならず防災業務全般に深く関与する安全なまちづくりの担い手としての活躍が期待される。

#### ■安心できる暮らしの支え

住宅防火対策や救急体制の一層の充実など、暮らしの安全を支えるセーフティネットとしての役割も重要である。また、高齢化社会の進展とともに、医療や福祉と連携を緊密にしたきめ細かな対応も期待される。

#### ■住民一人ひとりの自助活動の手助け

阪神・淡路大震災を契機として改めて認識された「自分たちのまちは自分たちで守る」意識を地域の防災力として結実させていくための支援活動が消防の大きな役割となる。

日本社会の未来像が混沌としている現在、消防の未来像をはっきりとした形で描き出すのは難しいが、消防行政に携わる者として、未来社会がどのようなものになると、この報告書でまとめられている「21世紀の消防に対する国民の期待」に比べられるよう努力していきたいと考えている。

なお、この報告書について、ご意見、ご提案等があれば下記e-mailアドレスまで

kobayashi.k@mha.go.jp

(以下次号へ続く)

(近代消防98年12月号)

## 堀内三郎氏

（京都大学名誉教授）  
（元消防研究所第二研究部長）

## 逝去



昭和23年4月から約18年間自治省消防研究所に勤務され、第二研究部長等の要職を歴任された堀内三郎京都大学名誉教授が、さる10月9日午後7時頃呼吸不全のため逝去された。享年82歳。告別式は12日、京都市西京区のご自宅でご令妻禎子さんの喪主で執り行われた。

故堀内三郎氏は、建築、都市防災の数少ないオーソリテイとして消防防災界並びに学会に多大な功績を残された。昭和35年には日本火災学会賞を受賞されている。京大退官後名誉教授となられた後も、昭和60年から約4年間日本火災学会会長として活躍されたのをはじめ、京都市防災会議専門委員、大阪府防災会議専門委員等を務められた。また京都市まちづくり審議会会長も務められるなど、消防防災関係のみならず景観行政にも大きな貢献をされた。

また本誌論説委員としても、昭和48年8月の第一期から平成4年8月の第五期まで約20年間の永きにわたり、本誌上に健筆をふるわれるとともに、大所高所よりご指導をいただいた。平成6年9月号の「平安建都1200年の重要文化財を守る京都消防」の特集で、特にお願いを申し上げ「これからの京都は？」と題する京都の伝統的景観の今後のあり様をご執筆をいただいたのが最後となった。

ここに故堀内三郎氏のご功績を偲び、心からご冥福をお祈り致します。

堀内名誉教授の略歴は次のとおり。  
大正4年11月2日大阪市生まれ、昭和13年京都大学工学部建築学科卒、大阪府建築技手を経て、同13年陸軍軍役に入隊、同21年帰還、同22年戦災復興院京都建築出張所、同23年消防研究所、同27年消防研究所査察課長、同35年消防研究所査察課長兼検定課長、同38年消防研究所第二研究部長、同41年京都大学工学部教授、同54年より同大学名誉教授。昭和35年日本火災学会賞受賞。昭和60年5月から平成元年5月まで日本火災学会会長。平成元年11月勲三等旭日中綬章受章。趣味は読書、絵画、カメラ。